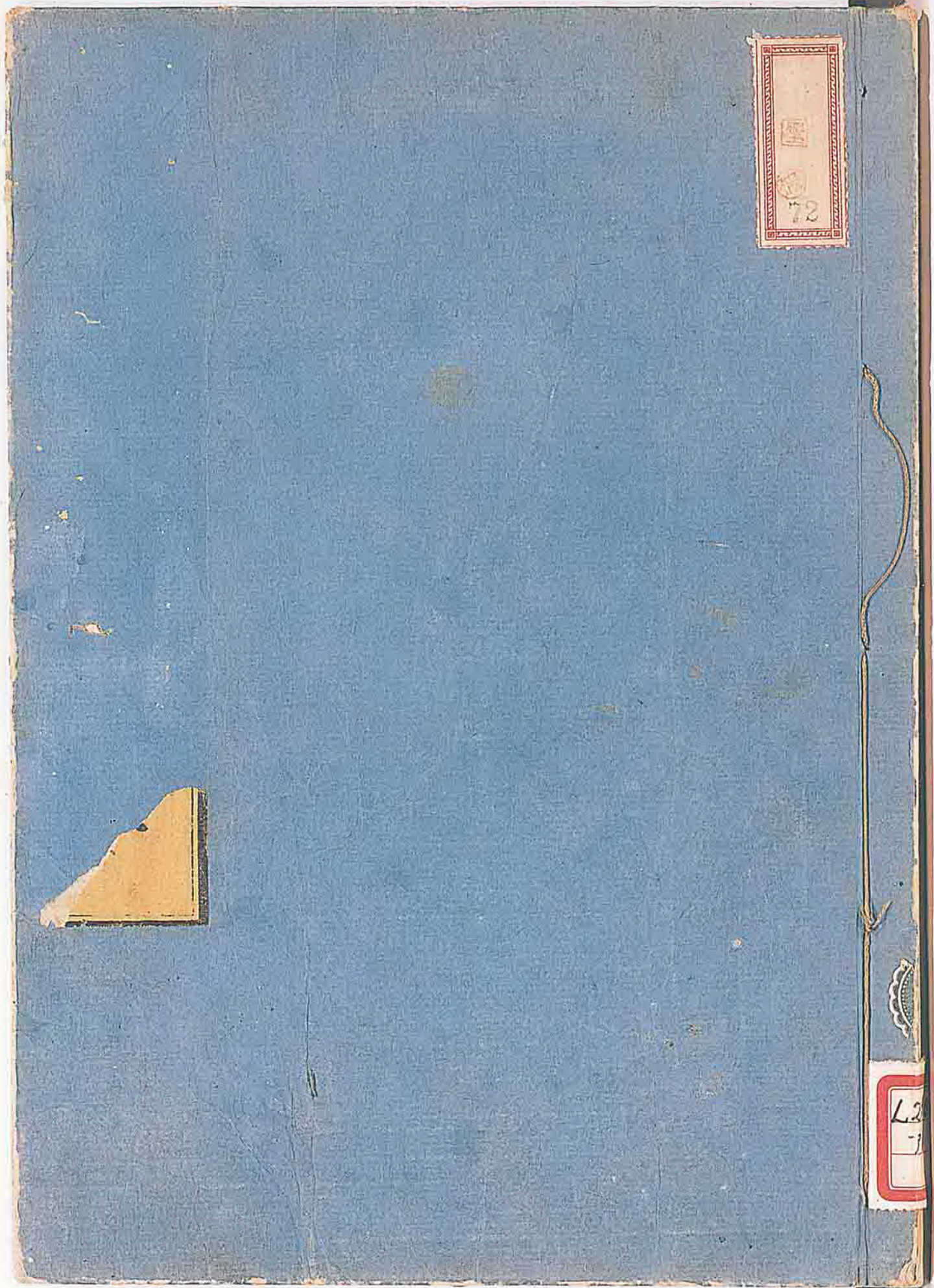




木曾路名所圖會卷之二

目錄

寢物語里

妙應寺

常盤寺

不破關

關ヶ原

國分市第

班女旧蹟

美濃中山

南宮金山

新使殿

龍飛御宮

和射見野

青坂祠

黃鳥池

戸佐々宮

美濃中道

天武天皇行宮

野上里

不破頓宮

南宮金山

新使殿

龍飛御宮

車返坂

親雲聖人旧跡

大台古隆塚

月見祠

竹中重治城址

桃賦

垂井

垂井頓宮

十禪師社

本地堂

稻荷祠

今須

黒血川

開藤川

不破光治若

首塚

伊富貴神社

垂井清水

民安庵寺

高山寺

元三太作堂

山王祠

木曾路名所圖會

氏神祠
 辨財天祠
 千手觀音
 神明祠
 地藏堂
 空也
 新地堂
 美濃御山
 相川
 國分寺
 御勝山
 金生山
 呂久川
 結祠
 名産甜瓜
 荒神祠
 金數金床祠
 神明宮
 神田代祠
 天領神社
 大領神社
 五層石塔
 養老庵
 金蓮寺
 養山
 青墓里
 甲塚
 寝覺里
 後光嚴院帝小嶋頓宮
 美江寺
 谷汲觀音
 中殿高祠
 高八祠
 十八祠
 松之宮
 七之宮
 國府宮
 石宮
 南宮
 養老祠
 春王墓
 安王墓
 青野原
 小條竹塚
 赤坂
 杭瀬川
 美江庵寺
 糸貫川
 數々祠
 十一面觀音
 衣之堂
 十之堂
 活湯所
 日目上人茶毘所
 幣掛松
 朝長墓
 子安祠
 笠縫里
 自然居士墓
 席田

本居二回拜

船本山
 岐阜
 長柄川
 天神社
 比奈守神社
 御井神社
 村國神社
 岐蕨川
 名産英漢紙
 伏見
 可兒藥師
 源宮
 永保寺
 河渡
 稻葉山城
 鶴飼圖
 往來松
 新加納
 各勢野
 鵜沼
 太田
 太田川
 在原行平塚
 本堂
 間魔堂
 和泉式部墓
 平巖
 河渡川
 稻葉山
 岩田小野
 瑞龍寺
 飛鳥田神社
 針綱神社
 帷子山
 名製園銀活
 懸主神社
 鬼首塚
 阿彌陀堂
 護摩堂
 鬼岩窟
 細久手
 乙津寺
 因幡神社
 加納
 苗部神社
 加佐美神社
 例祭條の圖
 岩窟觀音
 名産蜂屋枿
 金山古城
 御嶽
 庚申堂
 一吞清水
 月吉日吉里

琵琶嶺
竈山
西行硯池
根津甚平墓
中川神社

母衣岩
伊勢參宮別道
大井
坂中
惠宗神社

烏帽子岩
七奉松
八幡宮
與坂番所

大湫
西行墳
大井橋
中津川
落合靈社

木曾路名所圖會卷之二目錄 終





今頃

関ヶ原やで一里むつと居益や書くは宿東の端小
居益塔下中つと坂あり清と和宗又訓と手白ゆり
幸なり嶺あり多く神社ありは手白て通る湯と

後川記

一丈関ふあられはあままだぐさき所とるる

妙應寺

今頃の宿中妙應寺の東あり青坂と号し曹洞宗西
僧然深かり寺領二十石用山道元禪師の二世義山和
尚卒願とむり今頃の城主長八郎左衛門重宗の母菩
提のおふ建立なり今伏見宮内卿願とる

青坂祠

宿の東妙應寺の例ふあり妙應寺の徳守なり宗神孫余
権五郎景政と重宗の祖父秀宗と義久の礼後小
あり土佐小廟一は祠を建ふ

親鸞聖人舊跡

今頃の東飛来村聖蓮寺とる

桂木

聖人手白く極のりあり以前と旧跡もておく近世
聖人旧跡と其能澤なり

黒血川

今頃の東山中村の川の方の流をり

富士紀行

まよふと見れは名を黒血川とるは流の系う那

寛孝

本書二二

後川記

黒血の橋とるる所を

太平記

白波と岸れ岩根のれとも黒血の橋の名をせうとる

華良公

はは時刻と移る日向と大將軍ふ高城後守降泰月橋唐守降細
川刑部と頼春依と本判友成頼依と本佐佐判友入道乃基子貞近に

守秀総は外諸國の大名五十三人都合其勢を万餘騎二月四日初とる
日六日の早旦且近江と美濃の境ある黒地川も流にり奥勢も橋井赤坂

母居ぬや聞かれむとくおぼ座しやてあふの國の黒川を流るて後
ち黒川をあて其間小陣流と取るける作いしへり今に到るまで

勇士猛將の陣取と勢と待川も後とふしり前も水取とふ事とて
こそあるふ今大河と後とあて陣と取とる事とふ一つの兵法ある

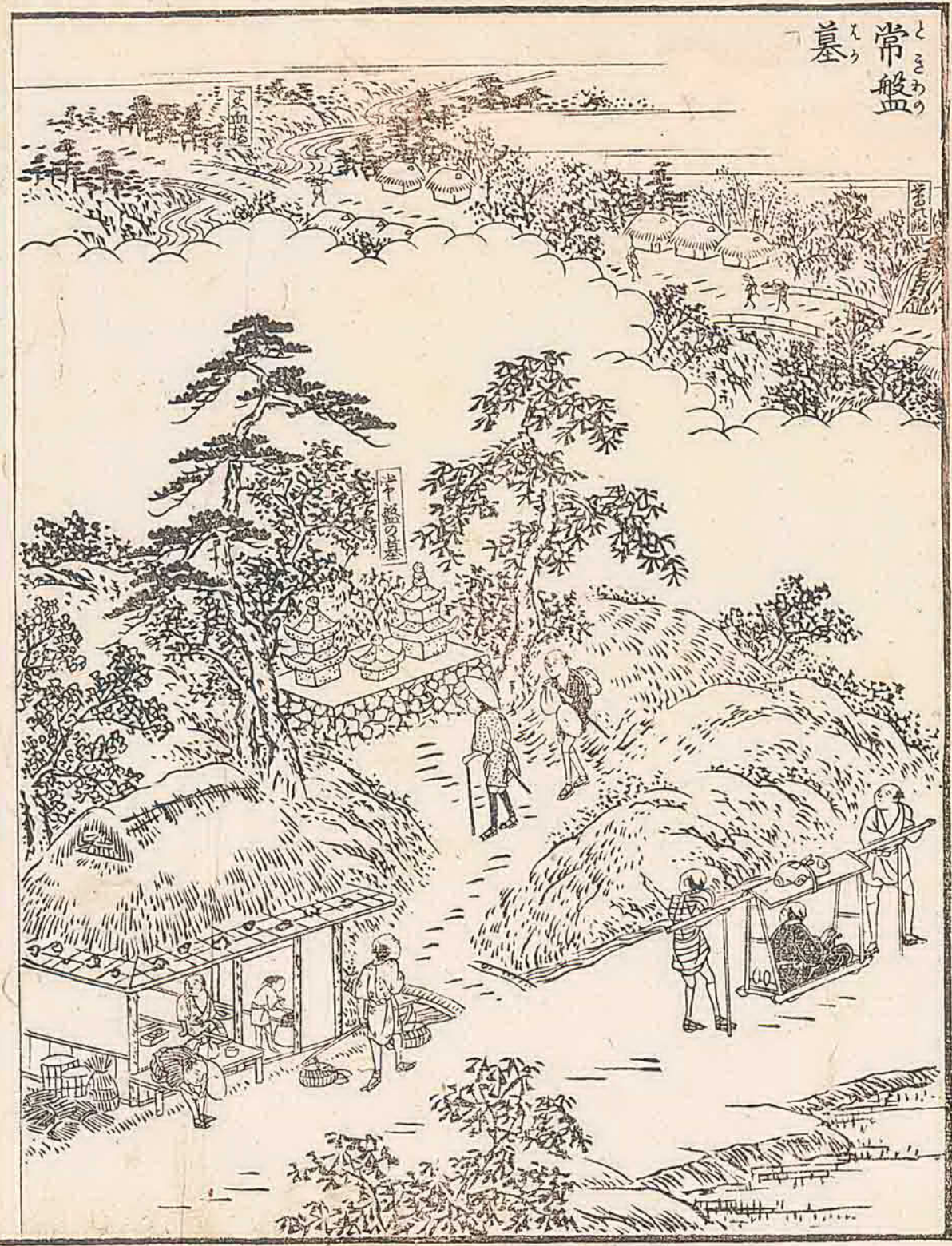
むり漢の高祖と楚の項羽と天下成事ふ事八ヶ年が同戦ふ止とる
けふある耐高祖軍ふまけと述る事三十里討破とるるををわすふ

三ヶ年勝もも足るなりと項羽に十餘万騎破とるこれと追ひつるが其日
既ふる夜明は漢の陣へ押とる高祖を討ふ亡さん更とる

既ふる夜明は漢の陣へ押とる高祖を討ふ亡さん更とる

けありとせも勇々れま小高祖の臣小韓信とひい兵大將ふあて陣と
 取らせたる小韓信のどや宵小大河をあて橋成焼落し舟と打破とせ
 持つてけるこれと述も免るすうた所を知く士率一引も引かみか
 討死せよせふさんねの謀なり夜明けきば項羽の臣十萬騎めくあよせ
 破成小勢なりや悔く我を即討ふせんとん其勢繁然とて左石と顧成
 けるる成韓信が兵二千餘騎一足も引も死とあせふく戦ひる成小項
 羽多しふうち負く討く云廿万人逃る成逆更ふ十餘里るう泥とさひ
 泥を隔くこちとて款ともかか交得くせ橋成引くせと居りける
 漢の兵勝小勢と今青負て項羽の陣へ突んとけりよ韓信兵を
 あけ悉くやたるい家男ふ屋う有汝等みか持とこ海の云根と棄く其
 囊小砂とへく抱べいとせ下知くけ兵兵云な成ね事うとさひか
 大將の令に應く士率みか持所の粮米と持く其袋小砂とへく項羽が
 陣へせ押とせとる我よへく項羽が陣の糧をるる小は方留成さうい

常盤墓



沢城隔る馬の足も立に渡るに極力と祈りて陣取つたが時韓信
 持せしる所の所囊城に不投入れくこれに堪ふがて其上城に下る小源
 泥さるに平地のや一項羽の兵二十万騎修日の軍ゆふはうとぬまを
 敵寄るに道にせしやけりて常經とてく寝る所より高祖の兵七
 万騎國をぞしをけりて押よせられ一戦ゆも及ば項羽の兵十萬騎
 みふ河に水におぼさくけりてさふりそと名付く韓信が囊沙背水の謀と
 ちやあり今昨秦昨を頼春が故城大勢かりや聞えつてさふ便を
 背ふがて國の藤川小陣を取らるも專士卒の公成部よりめりて薄び
 韓信が計成るにさふるさふりて去程小國司が家郷の勢十萬騎並井赤
 坂青野を原より充滿して東西六里南小三里小陣を張る
 常盤御茶墓 今頃の東山中村のわが氏家の傳ふありさふりて石塔三基あり
 其從者の塚ありんか一説小常盤驛河守が墓ともいふ
 義朝のさう為小似り秋の風
 黄鳥 川上をさる盤城の東の方にかがれ
 それより連なるれ常の盤ふあり
 木三ノ五

家集

梅の香の下り水乃使をささられき乃れ常かん智

家隆

大谷刑部少輔左降塚

山中村左の方乃山下あり
 聖長親後藤堂家これと建る

開藤川

松尾村西小あり水係伊吹山の麓より流る小園街道藤川の右乃
 東城村松尾村の西右破の園れ下と流る多良川を藤川と云ふ

古今

美濃國國の藤川をささりて君ふはるん小藤川代そふ

大欽所

風雅

神代より道ある國ふはるん小藤川代そふ

光明筆
 入道

後古今

美代ふはるんもむ月とる城郭をささる國乃藤川

國伯
 左大信

後結述

そは免る一國の藤川をささるも藤川をささる小藤川

定家

日

けふさう代くのさうれを思ふ小藤川我身小頼む夏の藤河

藤河
 藤河

新後撰

いふせん開は藤河をささるはる一藤川をささるのささる

藤河
 藤河

日

けふのさうれとささるさう一藤川をささるの夏の藤河

大政大臣

後千

藤河をささるさう一藤川をささるの夏の藤河

為世

千載

藤河をささるさう一藤川をささるの夏の藤河

右大臣

日

新千

新枕

名考

日

建保百首

日

雪王

新後め題

十六夜日記

十八日みの國小園の飯川にうろねふま川ありひはるあふ

我らとまゝあふはる人あふていつはやを帯の飯川

阿佛

飯川記

藤川乃橋をみ折の朽をふとんく

本巻二六

一条内大臣

後人あふ

好古

秀能

二条園白

良基

康光

能頼

内大臣

実隆

中院通村

あふともや幾多浪をいつてむりうは絶ゆる飯川の橋

一条兼良公

母の君あふ一統の絶へてよ飯川代替るせいの飯川

日

不破開古蹟

松尾村の内西の方飯川東の原上へは色の方城今太本戸といふ

千載

あふまてふ不破の園を小膳孫とて爰ともえを遠きうられ

大中臣親守

新古今

人あふぬふもの雲屋の板庇あふあふのちまたは秋のりせ

攝政

新後撰

秋風小不破の園やれあふくもさういふ中て月を満る

信実

新格

古くあふくもさういふ人あふぬとて先よ不破のせれあ

源頼康

後撰

いぬててまゆるより古く不破のせき路をたわむるあ

飯永信忠

後後撰

あふくむゆをれ雲あふくそくくさくみ毎に荒橋くく

後人あふ

清集

不破の山にせのなぬ園の屋とまるといふをくさるるあ

市制長

支本

雲うれは次の出島とめあふくそくくさくみ毎に荒橋くく

石森

日

見あふく人あふくさういふてくさくみ毎に荒橋くく

仲心

日

あふくさくみ毎に荒橋くく

光俊

不破のやう紅糸らわく梢こずえより嵐はなぞりをよめ園守りゆ

後城門首

東路の不渡の冥屋乃鈴虫成むやや小娘の空おひひるうな

交本

婦の室の
ふの中
止目へ
ねく
冥屋より
と秋
各々
とく

光復

不建

不破の関屋さん板びとーまやーおんうわーぶるまわり

望月と婦人其屋より程乃時辰も月空のうしろを映し

阿佛

光り紀行

[illegible]

とゞく嵐松本よりとゞく日づけをいへぬ本下道

あなれふぢやそ、越えそとて思はば不破乃罪屋なり茅屋の板壁なり

一
 隆乃中々我るも毛後系極務政殿忠あ種み／＼のらゐて秋の風と

よふ歩のふかきふたつとくけうを風情ふうせいをよめうとふねがひ

三丁のふぶのこもぬもあつふゆがえくこもば^{もな}きく^{たか}うらぶね

後川記

山中とてを過す

郭公のうみ月のふゆにおつうく雲霧孤志のうぐ

兼良公

本爲二ノ七

関 藤川
不 破 古 閑

不破の實を以て

同利

りる
宿

四三
五二
六

部

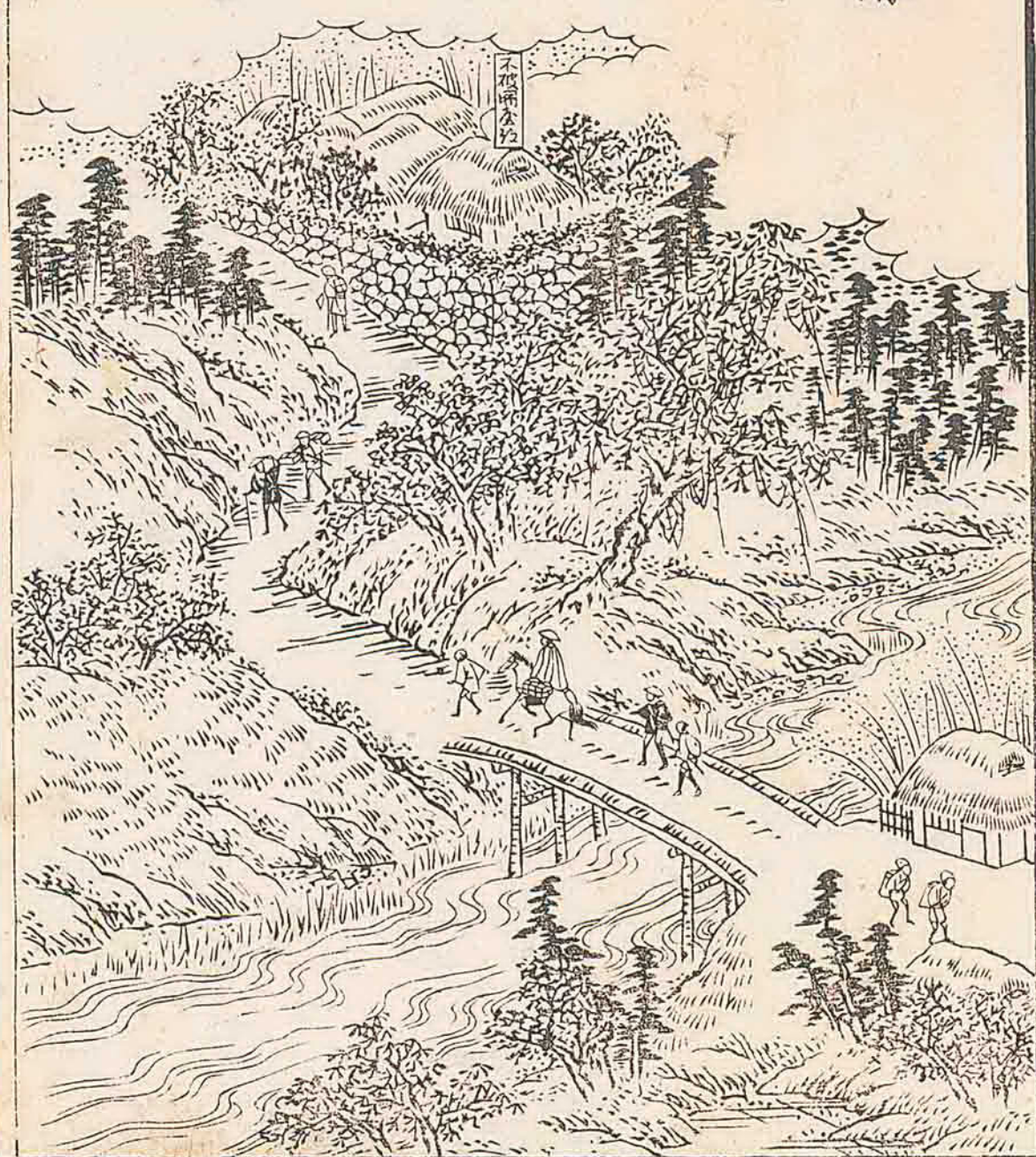
३५

旅人むや

泊る舎

不^ふ破^への月

本圖



不破の關原を足踏るに何せれむう一歩得る物哀れ之中津門
振政乃阿まう一後たけ秋の風や疎りひ一幸なりとれり死あせ
られて

あまのふ不破の関原の板庇をうへをふさふる事 全

戸佐々宮 後川の東岸上の神社遷の傳ふあり

祭神 天武帝の靈を鎮まふ 美濃神名記ふ 國比男明神

むう清見系天皇東宮のうへを様して古聖ふふ入のひいひも
程ゆう一うじく大友の王子に襲まてさうしたふふ城のぐれ
物く伊賀伊勢北國を渡る美濃の郡より行宮をさうれ一幸を
日本紀なりとふさう一ゆきやと事遠ふあくるれを宮の齋庭なりと
たりふさる人は有ぐさかふ一今さまうわらふ乃知ゆふあま
かう道ふさうとて見く

阿まのふ郡上の事候う文の記もつてんかつてり 桑良公

本居二八

月見祠 小八月十八日月の夜に秋の夜をさうふ美濃の中山の夜

如きハ後藤のゆきぬ後藤ふふ一後藤ふふ後藤ふふ後藤ふふ

不破河内守光治若 松尾村の南北ふありは光治と斎藤就其の別なり

に依り後井六角の押へのあふは所は若成梅ふ慶長陣陣

美濃 關ヶ原

壺井中一里宿中小八幡宮の祠ありは石の生土神に

は祠の側より若狭越前へ通る北國街道なり

美濃中道 國ヶ原駅中より牧田へは道なり石標と建ふこれを牧田街道

より伊勢系各尾張の宮へも距離ありあ人のあはれに戸へ下れ

梓弓 あまのふの美濃の中より我身ふたなるせりた 好忠

竹中半兵衛尉重治城跡 國ヶ原の方懸ふ山の奥小菩提村より所ふあり

軍例の景像し

首塚 慶長戦死の塚なり

毛ゆる火也見まはる葉れりるかな 蘇島
 關原與市屋敷跡 高野のつ士なり俗の栗田にあり半ありふり合て
 水と跡上一人なり其子極は犬房九とふけ子孫

天武天皇行宮 野上村の西に還右の方山間の平地をり又慶長五

桃賦 其地の字なり天武天皇元年
 六月より小井村より一里あり

天皇於茲行宮興野上而居焉此夜雷電

雨甚則天皇祈之曰天神地祇扶朕者雷

雨息矣言訖即雷雨止之戊子天皇往於

和豐檢校軍事而還已丑天皇往和豐命

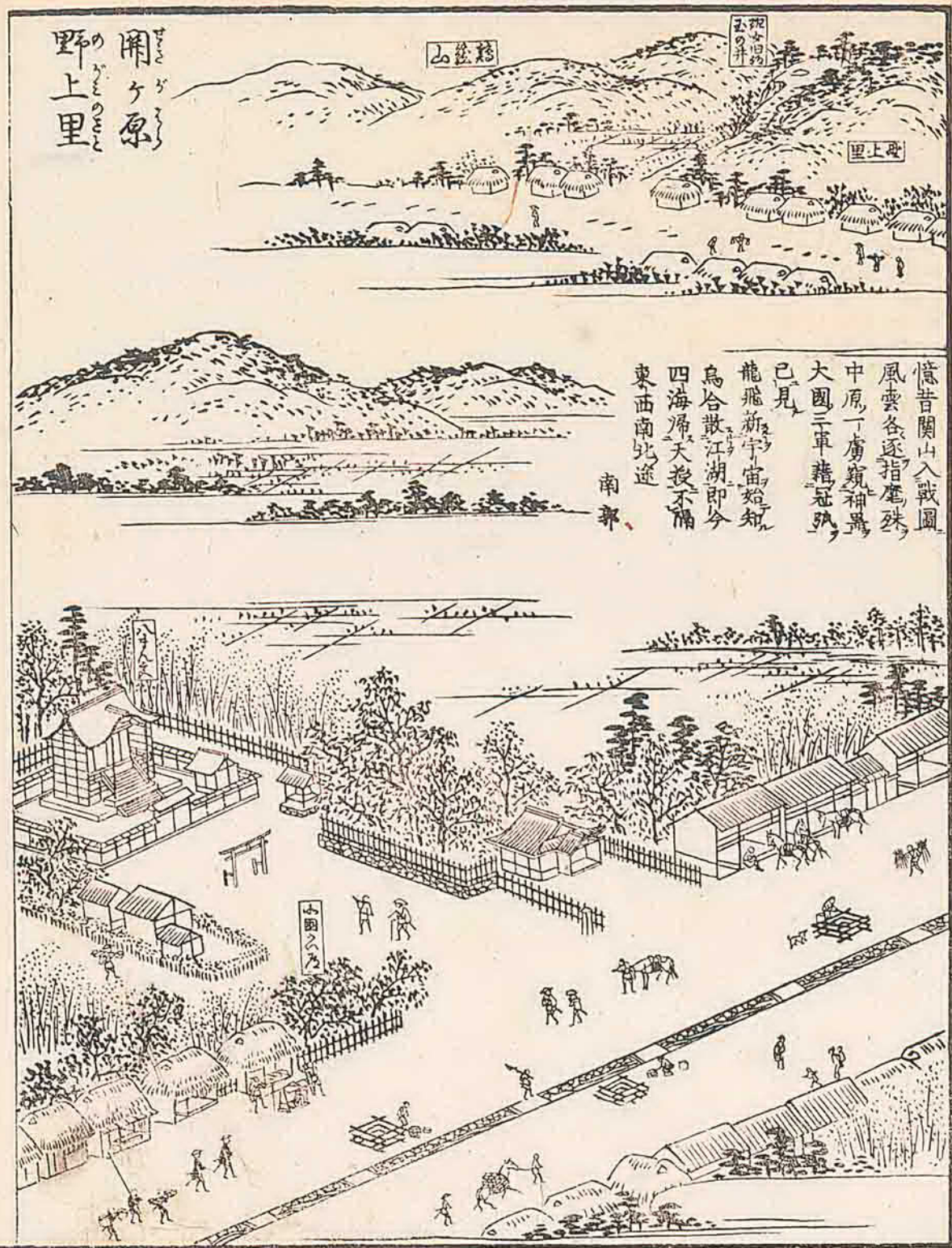
高市皇子薨令軍衆天皇亦還于野上而

居之

伊富岐神社 延喜式不破郡三座の内に

祭神 鸕鷀草葺不合尊 鳥居 額 伊富貴大明神
 野上伊富岐兩村の生々神々

本号二九一



憶昔關山入戰圖
 風雲各逐指麾殊
 中原一虜窺神異
 大國三軍藉冠跣
 已見
 龍飛新宇宙始知
 烏合散江湖即今
 四海歸天授不隔
 東南南北途
 南郭

野上里

卜 奶 柔 邦

積野上の南鶏籠山の麓
 往還より少く西の方へ入

野上のののへの馬うま上の長者ちやうしやうありてふ花はな子こ
とて遊あそ女をありての若わ田たの少せう將しやうとて人ひとありてふ花はな子こ

下見とて扇を歩ひ小そうく別きふり花子園を出てさう
 上見とて扇を歩ひ小そうく別きふり花子園を出てさう

の少將小免こけんより事謡曲うた小作せうさくより其志そのこころ傳つたへて試こころ親おやを

堂の卒意ハ班女ヲ守奉ス
所持一室切の尺八又山上
鷄籠山千率松とて古本有り又堂の

是の方こゝ玉乃たまの井いより英泉あり
 此所こゝ野上ののの長者ちやう第だいやあはりとわ

いふくへをまき駅なり

漢人志

為秀

濟製

定象

竊道

本卷二十

永貞傳下

援
政

降信

後西院

赤坂あぐ一里十二町 駅中東西六七町 許お對して巷城
 なら其餘教在にいゝ都會の地易して商人多し宿中に

南宮の大島居あり

垂井清水たるみのしみず
垂井の宿に泉あり
源頼朝の宿に泉あり

卷之四

告
相

葉

此ぞくろけふけとて後小遊女^{ゆうじよ}なりぞあまゝと杜牧^{とく}の

珠簾十里揚列路といふ事瓜をひあそび人侍わ

あさふくろあけそまされ雲母の三日月は神さる濡ふん
 兼良公
 け清水を特々清冷りく味い甘く寒暑小増減かーゆさくさん人
 湯気あふぐに足さる清くすけ清水流る似るさく梅聖念が詩乃
 さくあふくろあけそまされ雲母の三日月は神さる濡ふん

美濃中山
 美濃の中山より西へ飛来すまでの山嶺を云ふ

後古

後拾遺

後拾遺

丈夫

日 日 日

後拾遺集

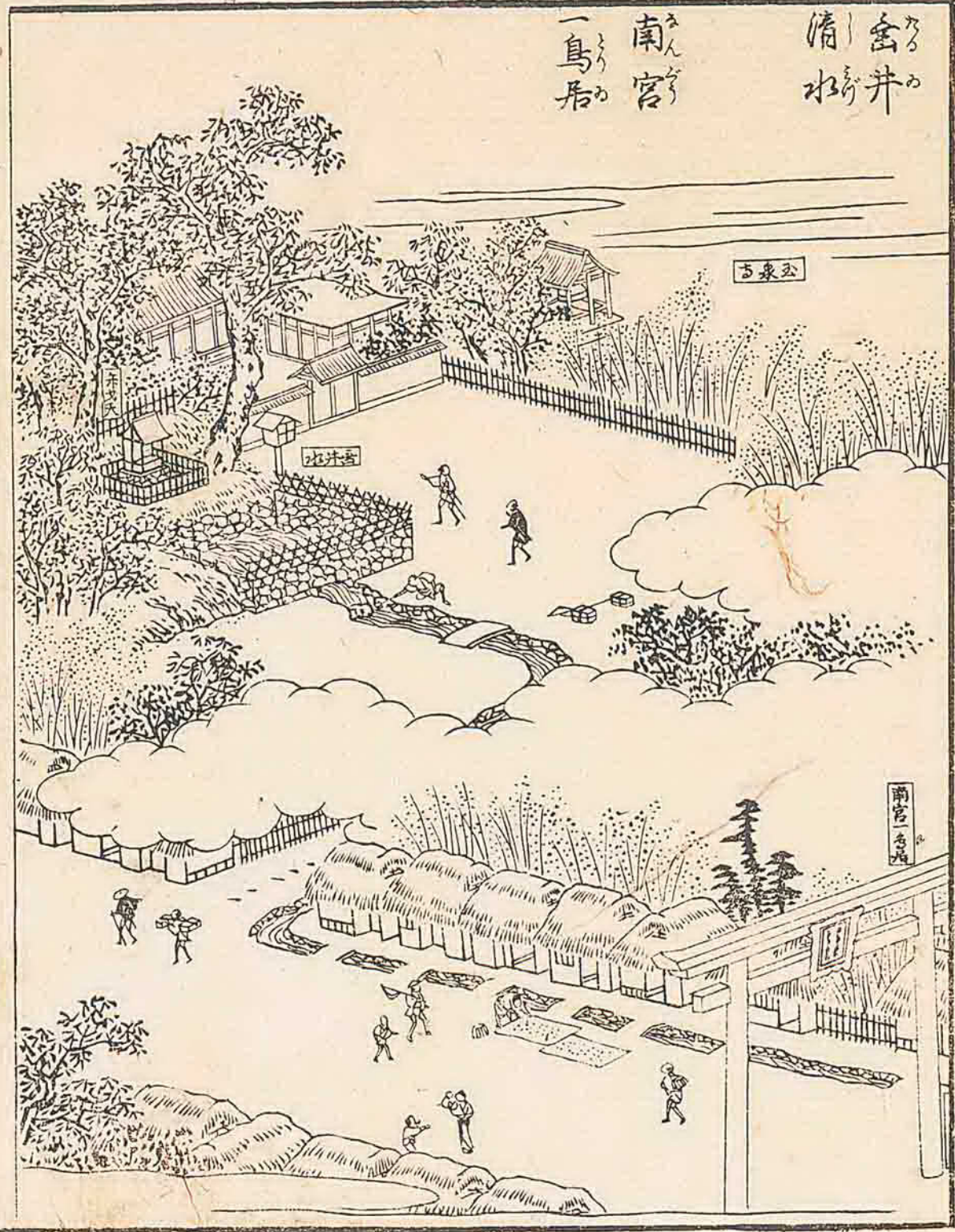
色うもれ美濃の中山杖くくゆさくさる逢坂の雲
 定家
 けさくさくみの中山屋の川もさくさくゆさくさる國の菰川
 兼良公
 都をけさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 中勢親王
 みの國不破の中山雲さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 為相
 里清くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 中勢親王
 ままか國屋の杖乃下くさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 日
 やさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 二条宰相
 ぬさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

本巻三十一

清水
 井

南宮

一鳥居



॥

阿

浚拍系院

天平十二年續日本紀
見くろり

後光嚴院文和三年南軍に就きて少くも一行文を建所と

至徳三年八月日願主理衆とあり

文和三年六月煥光教院乃帝志くゆふ所也

記
 養
 敵を三々々々
 道の
 おり
 垂井
 氏安寺
 律院

ありては、^{おと}松や^{みづ}文和の頃、^{あき}後光厳天子南軍に^{もとの}叛を起し、^いて小島より^こ切寺^{きりで}河^くつ^つ一^つ次^{ついで}は寺ありて、^{その}せのひ今は其^{その}地^ちより^い乃^い石^い礎^いなど

葉良公

義詮朝臣を兼く依く本秀綱を頼み固く備ふべし東坂平此事を爲す安らむべし

くわく園くわくの勢せいとも侍さむらいさんと議ぎせられけるが吉野殿よしののより大慈院だいじいんの法印はふしんは

大將の病小止門へ呼よせう雲沙法一ける間坂本と會步よふされん幸

五月六日 義詮朝臣龍駕を守護しなす東近江

の方へ落し行幸の位章見の二條の関白左大臣。三條の大納言實経。西園

寺大納言實後。裏過大納言忠秀。松殿大納言忠嗣。大炊御門中納言家信。

四象中納玄たつりつ略持しうてい。巽亭中納玄さんてい公直こうちく。虎山院中納玄こさんいん華定けいちやう。方丈辨はうぢやう後ごをを和わす。

子すゝ
 時方を中解
 時寛勤解
 由矢言ゆに
 如。攬并二品
 親王おとせ
 ありまゝに

[illegible][illegible]

少くも斜率林中將義を五料にて紙川林撫之河内藤原臣等
 一にてんささやあそんの
 三三三のやうかん
 三三三のやうかん
 十々々々
 三三三

金糸大京橋を史にた近將監令ハ馬江守刺真一兵死大船初取リた

これより武家院のくくくつて都合其勢二ふ勝勢和赤雲団の漢通小駒兵と先
て我を爲らざるふ故城に兵渡守負傷の子息掃部助貞祐はけに又幸雲団
小隊をく居るけるが其辺の隘者どもとつてひく又百餘人あつたの浦
知合て爲り敵を討るんとくすつた其主上を擁護してて梶野二品
親王清門徒の大衆渡りや兵具して爲るせの門主ふかを主とく
うとひふ矢をくかひは同坂中の發圓とて居るける本近江守
秀綱三百餘騎ゆく遠の後陣も通りくる成るまゝ山門の敵敵討の傍所
るれどもは討止すとて崖に兵五百餘人東西より列色んぐ足腰の射
手ふふ深ひ沢を隔てくさんぐ小射る間作く本三良を渡り箕浦次なる
寺田八良を渡り今村五郎一所ゆくみか討まふなり秀綱と頼と切る一族
あ堂たが流し踏止しとて討死しけるを見く公憂幸ふや思ひ人高尾四郎
左衛門入道と二騎馬の鼻引くして敵の中へけく共ふ安ふの敵馬の
を爲るむとくわくある所とて討まふれを遠く居延くる若堂た世七人

是へ合せく所とくめく討まふなり其取と後味ゆく強要をくれ止先きて供
奉の人とくも少く休先もく人やせ我るを塩津海津の地下へ元軍勢くふ
一隊も返あせは幸ふとくたひる人へやせひるるこれ道はかこの是
よ取上くかひはあし討をけくろろ程ふとく一の所返あもくろろ主上と
豫備は免されとくも早進とてさ駕樂丁もみか迎うとく一人もあられは
細川相模守後氏馬より飛ぐとくあざりふあり獲の上主上は負近せ
て塩津の山にぞ越られくる子推が股の肉を切趙盾が車け行輪と助くもけ
忠あへるどとせとく一ヶ月卿雲客或る長汀の月小鞭とあげ或る曲浦を
浪本棹うの心を巴振一ふひ叫ぶとぬ月夜の色ふとくむ胡馬忽小嘶く
路を美沙碛のうらふ矢ふと古人の書一征路の篇も今こそさひとれくる
これよりむぐ路次の煩ひもあつてくく又濃の垂舟の宿乃長者が宿と
皇居めつて義詮朝臣以下の官軍みかには色の子家小宿張るけくを居
を守護くはなる

仲山金山彦神社 勅宮小鎮座正一位勲一等仲山金山彦太神と稱せ
神通百有

祭神 五座 金山彦令 見野 今 國系女令 二座秘神と稱
續日本後紀 仁明天皇承和三年十一月美濃國不破郡仲山金山彦

同 太神奉授從五位下 則預名神
承和十三年五月奉授美濃國不破郡中山金山彦神

三代實錄 正五位下
清和天皇貞觀元年乙卯春正月廿七日美濃國仲山金

社説云 山彦神授正三位 同 貞觀六年五月廿二日金山彦神
授從二位 同 貞觀十五年四月五日金山彦神授正二位

神武天皇元年鎮坐當國府中又崇神天皇九年十一月中
子日遷座中山麓又天武天皇壬申騷擾時行幸又朱雀

天皇天慶三年平將門叛逆時詔祈誓神功最揭被授勲
本番二十四

一等 後冷泉院康平年中安倍貞任宗任亂亦有靈驗
被授正一位

南宮攝社

十禪師社 二宮と稱本社の内にあり
高山太神 三宮と稱本社の南ふあり

隼人祠 二宮と稱本社の内にあり
南大神 五宮と稱本社の内にあり

七王子祠 七座 大山祇 中山祇 麓山祇 籬山祇
正勝山祇 高龜 閼龍

勅使殿 本社の内にあり
護摩堂 長日天下安んずる所と稱

本地堂 無量壽佛勝軍地藏多門天 十一面觀音不動尊を安ん
宮寺と号し 元三大師堂 天喜年中 小

右瑞垣の内にあり

龍飛將軍家御宮あり社頭小三重塔あり日新小釋迦堂あり

藥師堂延暦十二年基辛當め末

落合社系神赤蓋鳥尊相殿五座平將門調伏の附勅令小

忽ち靈應ありより

胡千害祠系神豐王奉命

稻荷祠系神賀賀鬼令

山王祠系神日吉七社勅令

氏神祠系神大直日神二座

荒神祠伏して築こり又將門降伏の供品をこふ叔む

中殿島山祠數之祠系神塔古卷

辨財天社

金敷金床社祠中絶

高山宮山上興隆と云登る幸十八所

隼人社日新小あり

子泰社系神保食神傍井冊

神崇神天皇五年十一月中子日童如小詔して言我々

神明宮

十八末社系神

春園八雲宮 富士 諏訪 愛宕 日向 白輪

十一面觀音堂山上高山宮幸地幸ふり基地

千手觀音堂子安社幸地

神田代社系神玉依姫令とあり

松下社系神鳥合

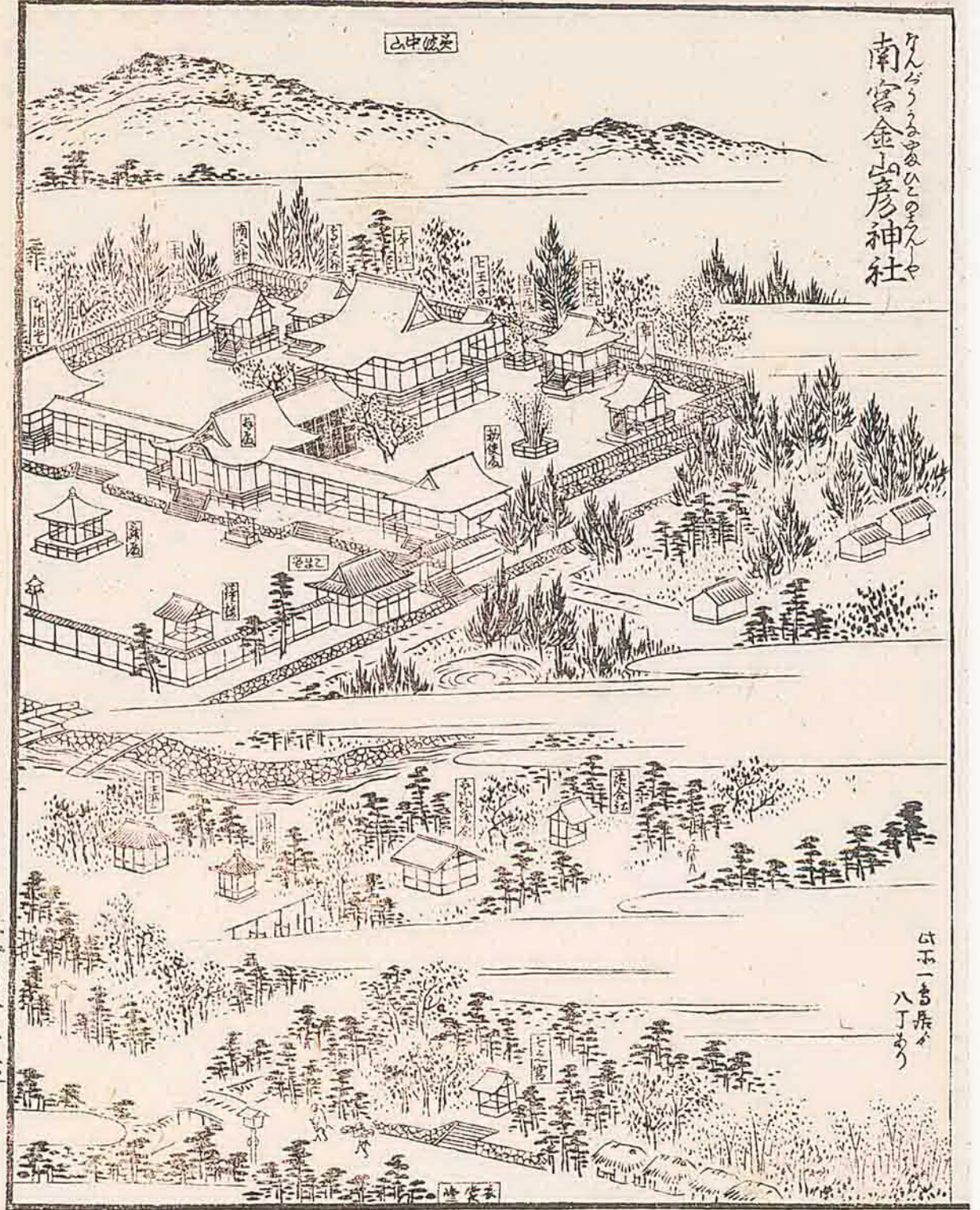
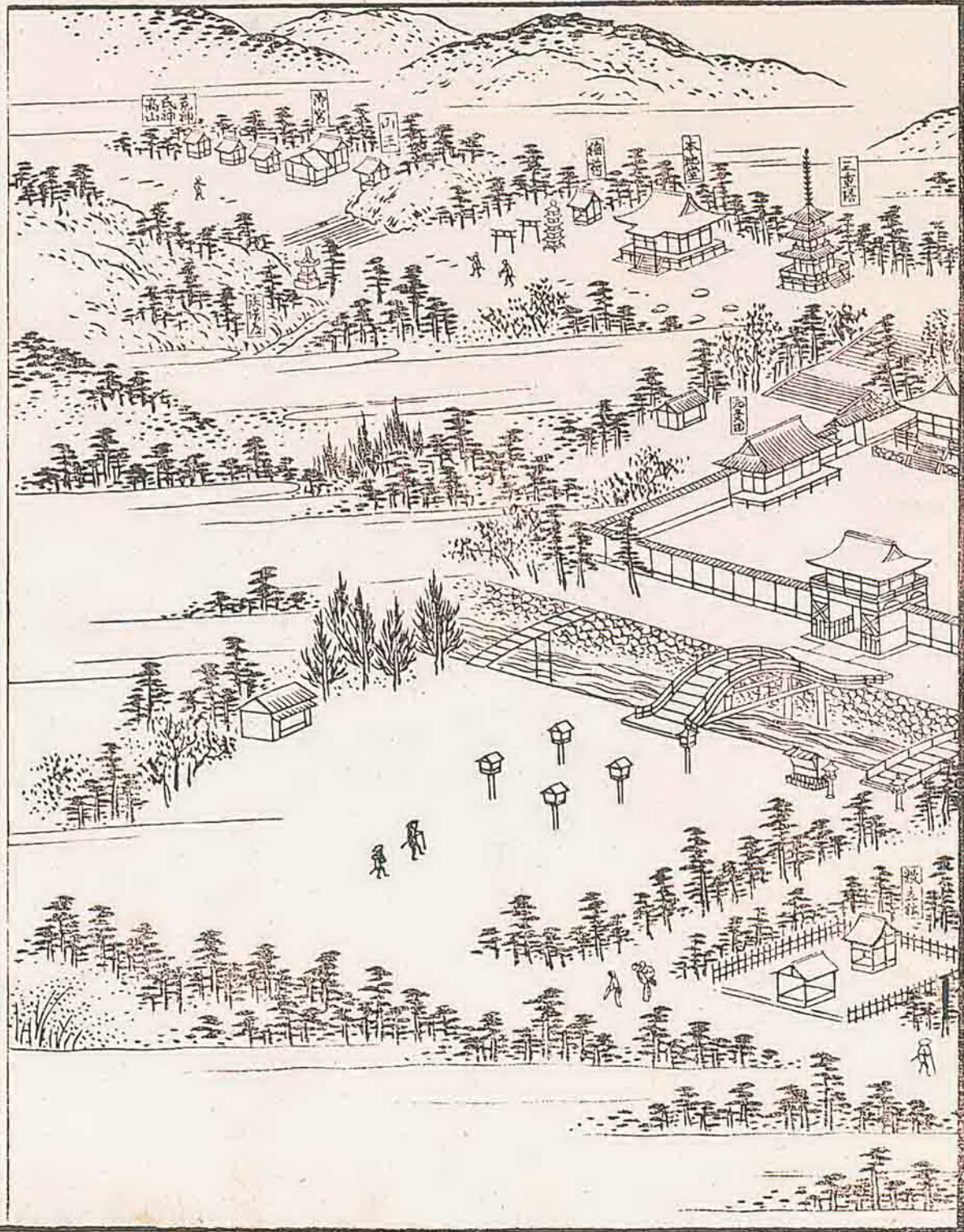
衣裳堂神社天香高松あり

大正十年絶ふとより

其後中絶ふとより

神明治社系神通盡敬皇帝とあり

神明治社系神通盡敬皇帝とあり

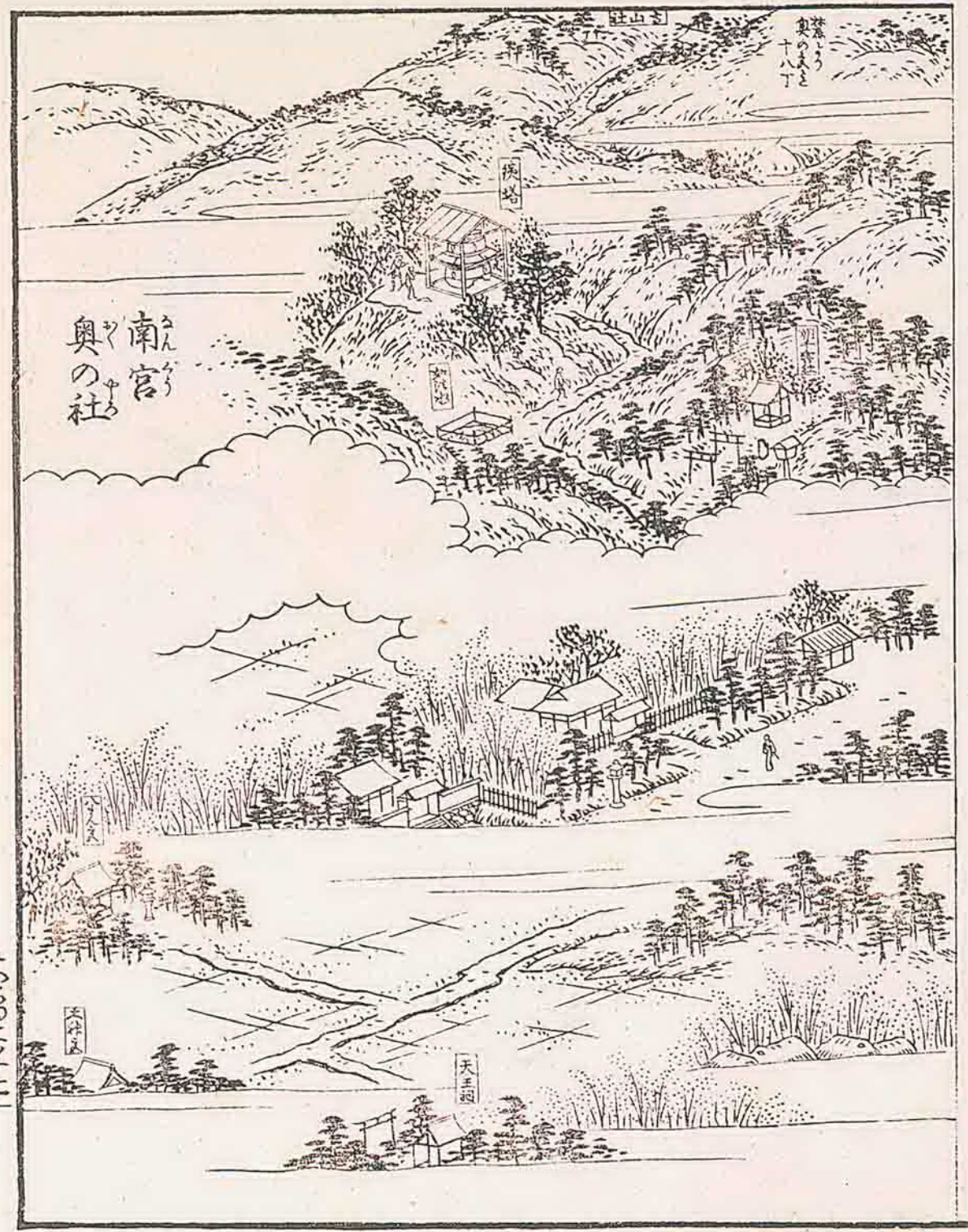


南宮金山彦神社

山中城

八丁

本巻二十六



右二七

天満宮

仕頭小
あり

七之宮

大門通小あり
町名山王と系内

十王堂

宮の入口
あり

地藏堂

日所
あり

大領神社

日村の内小あり式内なり
系神伊勢系遠王男事解男

國府宮

日郡府中村小あり式内なり
系神金山媛神埴山姫今豊王姫

首社

日郡荒尾村南宮より六十町あり
平將門の霊所あり生祠あり

将門をぬけく同系一花内人とさる付富社の集人神矢と説く村人
其首瓜る小あり矢の通りなる所を矢通村といふ世人首の流るる
島つ着立願を霊所あり

神本白玉椿

あり

新井遺

美濃山の白玉椿よりうら豊の明小ありうらめけん

從二佐行旅

南宮十首

色久ぬち玉椿みの山小神や八子代乃さきとさる森

利綱

鐘

高サ八尺三寸三寸厚サ三寸五分無銘
ひりき井戸の裏の中盆池より物居龍宮よりうらうと云

狛犬 狛犬は春日の作

石鳥居額 正一位中山金山彦太神と書れ

鐵塔 一品國智院宮尊純法親王の序筆

高九尺六寸七分

上耳

二尺五寸

上ハ菩薩六軀

下ハ四天王像アリ



如法經と書字一は塔
中ハ猶む幸あり
永正年中近之
其後中絶

上重子朝日
晦日ニ記シ
梵字アリ

古銘ハ鎌倉御代

平氏能登入道沙弥淨普

二位尾建立
其時奉行ト云

平氏左京亮氏仲

土岐美濃守源朝臣法名常保

新銘
是應永年中

土岐刑部少輔源朝臣賴世

再建修補ノ大檀越
右兵衛太夫秀行再興之時
奉行ト云々

法名真無

右兵衛太夫秀行

藤原散位秀顯

沙弥道順

源盛光

沙弥淨阿弥

勸進聖

沙弥妙全

大工河内國高大路家久

應永五年 戊寅八月十日 敬白

空也上人歌碑

唱れと佛を我とるる南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛

此時教立社の前みてこれを唱ぬ人は虚空より感動の聲ありて
止れおふけ奇哉人ぞう小建る日取六字名号石あり無仁
二年卯月日遊乃才二世真教上人に建付
五重石塔婆 塔の南にあり 銘曰一切藏經訓轉供養也
文明己亥比丘妙先拜首

年中行事 神夏祭禮

元朝 大宮持社外上列

日 奉地堂佛戸開并三朝之間修心會

日 大宮攝社神節會神事

正月十七日 步射神事

二月八日 牛王供

三月三日 二宮三宮神樂前後の儀あり
馬場後清米後三束の神事

五月五日 大宮二宮三宮神樂神旅新國府宮神幸

六月廿一日 市田植

日 廿日 夏越祓

七月朔日 一七日本地堂小修々法華讀誦修行

日 七日 大宮并本地堂開扉寶物出掛

八月十五日 秋山神交神前左右以芝飾山移明月獻神供

十月上旬日 市鎮座祭

日 晦日 大宮開扉法華會

十二月廿七日 市煤掃之神奉

正五九月十五日 大般若經系諸千度神樂

日 十一日 本地堂護摩堂修法

日 十七日 宗源三壇修行

正四十八月 每十一日ヨリ十四日迄三座宛寺宮勤行
十一日 系諸千度神樂修行

神事系禮神供調進魚鳥獻

其外月次神事畧之

神社考云

南宮山神者天武天皇白鳳之初所建祭

也其華表題曰正一位勲一等金山彦大

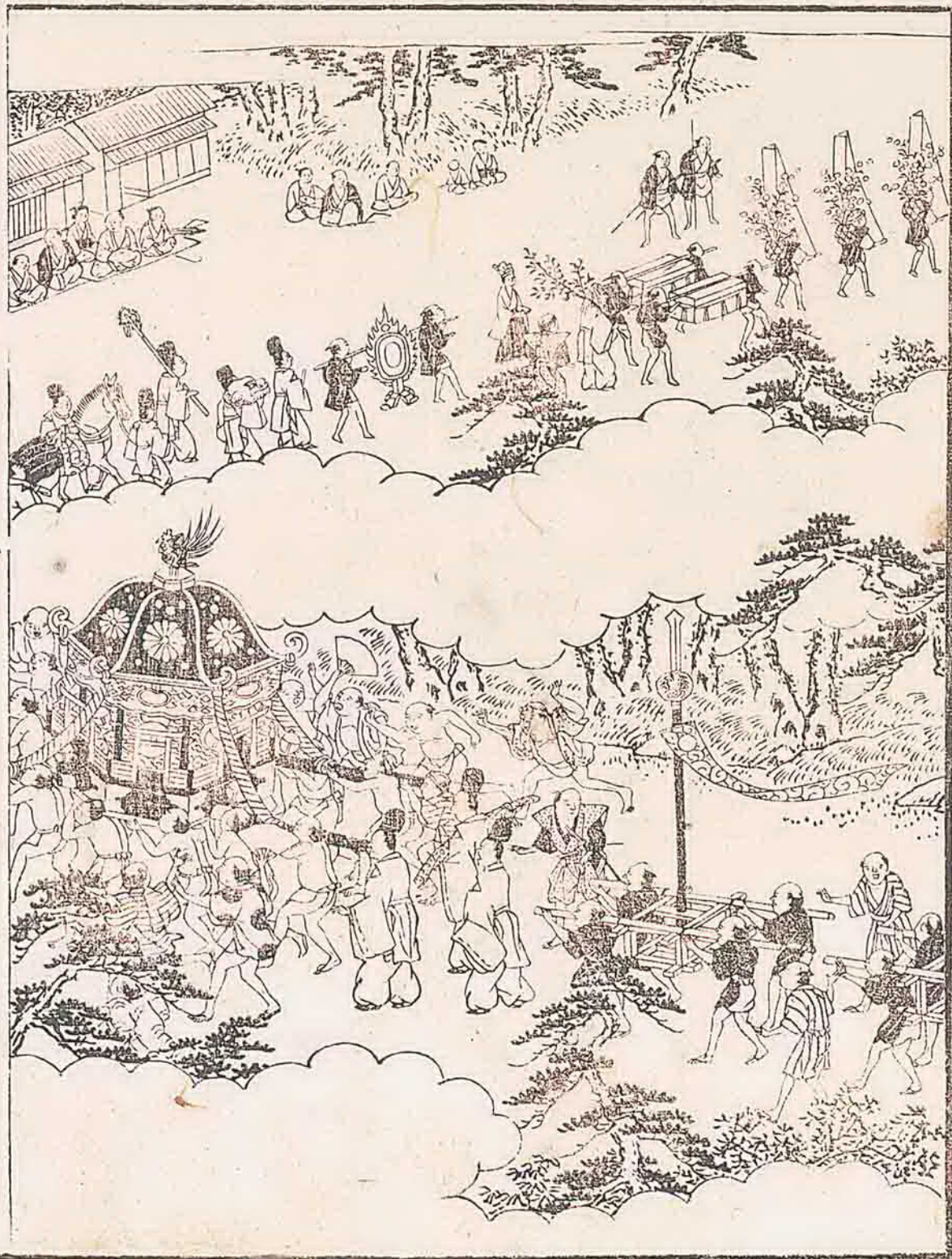
神金山彦者何神余答曰日本紀神代卷

所謂伊弉冉尊將生火神悶熱懊惱而吐

即化為神號之金山彦是也此神於五行

為金神於是乎其人又言曰初美濃國不

破郡府中祭之後移于郡之南仲山故號



南宮
祭禮列式

南宮祭祀供魚鳥凡產于美濃者必以南宮為氏神云余復告曰天武天皇自吉野經伊勢入美濃塞不破關遂擊大友皇子蓋於此時有所祈美濃中山而後建神祠耶其人荅曰彼社家者亦云余余復詰問之荅曰朝敵平將門頸傳言飛入洛時神放矢射其頭今俗稱箭路御首宮者是其緣也

住吉明達天慶三年正月於美濃山南神宮寺修四天王法降將門二月十三日午時赤雲自東來入爐壇須臾臭氣盈場十四日將門伏誅

夫當社於南宮也稱其社事為發火南方を司る故ふりて辨るなり

陽神より文武兼備ふ故小國家崇まひ或は世の騷擾乃時を察あり事ありてびるなり所傳天武朱雀の朝ふは神功武烈に施し給ふ慶長の孔也我族安國寺より陣一此文を鑑辨し乃其店大猷院公の市附今れやく速く歩再営ありなり珍跋より社頭例祭る三月三日神樂渡市又五月五日も府中村の市流所より六月廿日市田極乃神変又十一月初申日の市ふみ神供も奥物試用也又當社の神寶小大織冠録の圖あり其形行豫の滄北より當宮よりへる今の據ある所小幸社あり寛永以來山下に遷座ある幸社の前より初殿お殿舞殿樓門左右智長石及檣様神樂殿市供所神庫神妻舍社僧集會所社人十二人社僧十二坊其外生去の面々近隣ふ多し陰晴は嫌ふに給ふ

蘇川記
五日の申乃時よりりふ移井乃宿ふるなりと南宮のありてんむ

そとぐつ物さぐくたちさぬよりいなり風流のふきなどありあや
 昔のめくあはばは所小遊女などありあや又新ふあや老成ふたつん
 幸於ふとくくさわなれむ

我宿のほろもろぬ萬葉歌とひうろ小所為の麻 兼良公

養老院

萬葉

從古人之言來流老人之愛若 大伴宿祢 東人作歌

同

田跡河之瀧乎清美香從古宮

大伴宿祢 家持作歌

續日本紀

元正天皇平城宮養老元年九月行幸同

二年二月再行幸從五位下多治比真人

廣足遣美濃國造行宮

同九月天皇行幸美濃國有當耆郡多度

本卷二九二

山美泉戊午賜從駕主典已上及美濃國

司笠麻呂 朝臣也

蘇川記

新野

十首

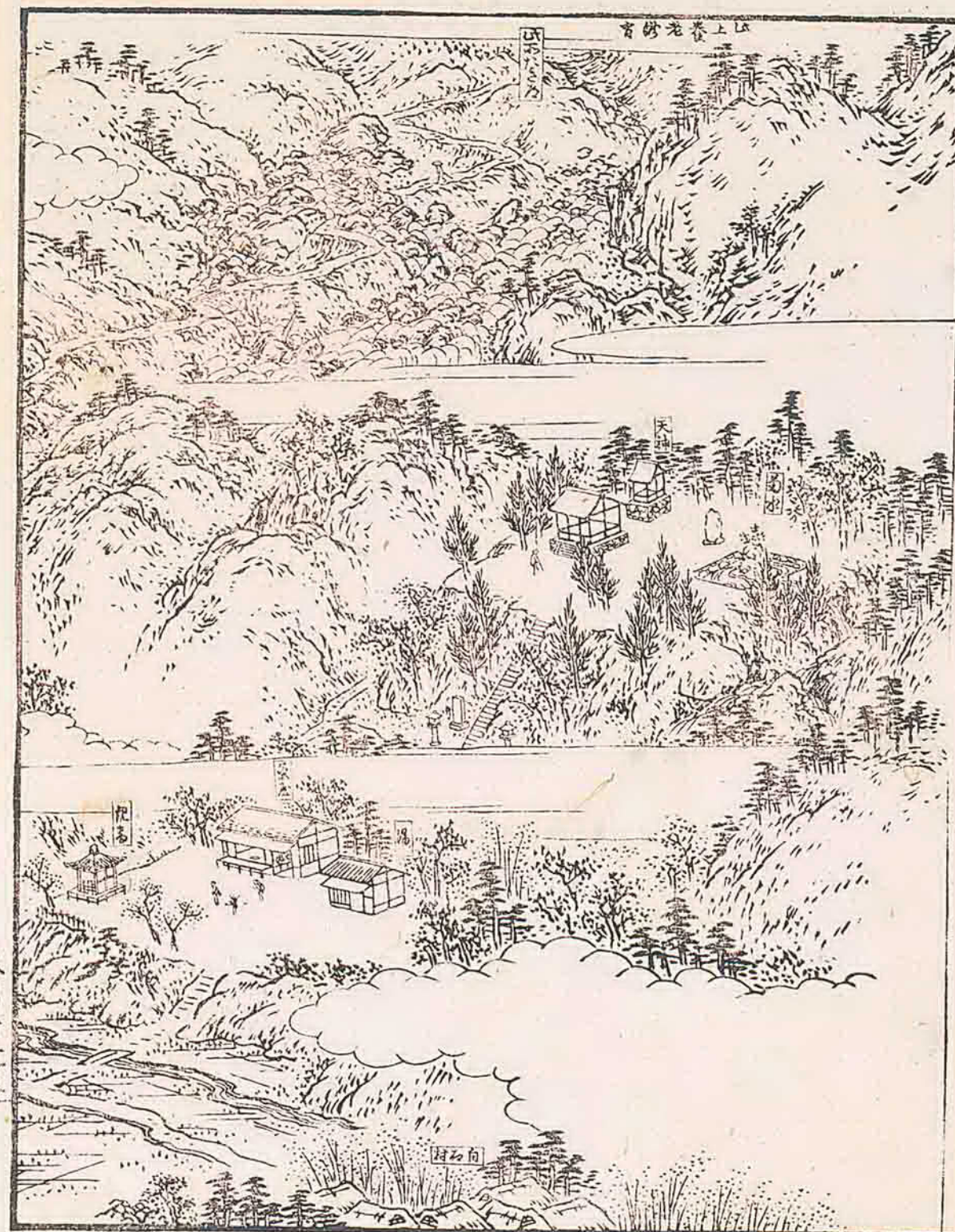
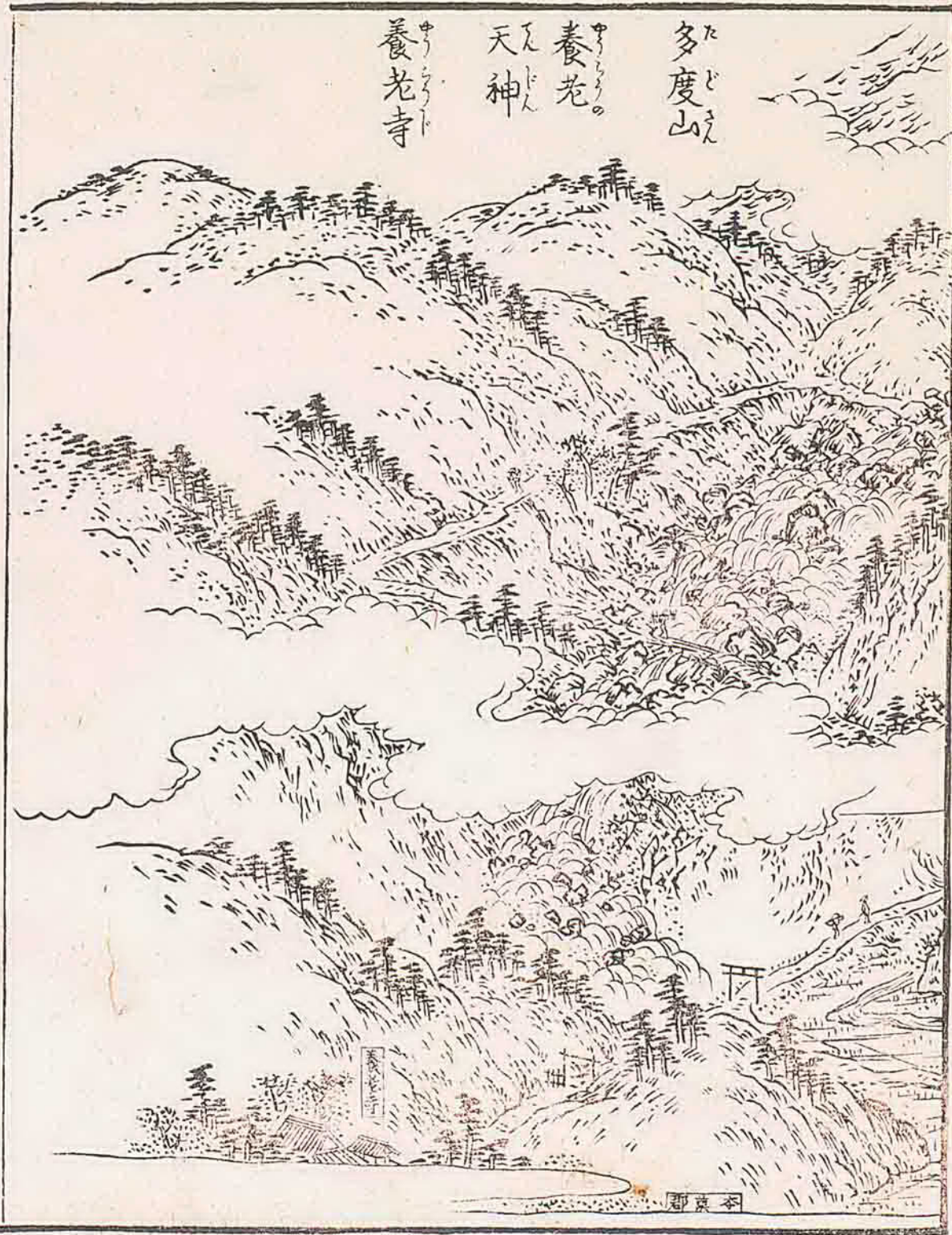
わえ川さるよりも新野のあ老とあふふはなれむ
 名も老成建ちたてふとふれさるれ泉のりへはなれむ
 一糸兼良 風早実績 佐々木 玄覺

養老社

社名は養老天皇の御宇に於ては泉のりへはなれむ

元正御極王道平問民疾苦悶物則天
 當之極多度之山天降嘉瑞地出奇泉
 清潔可食養而不窮人受其福王明之功
 一飲一如浴不古混死衰者再盛癰瘰可起
 有本如遷是萬古混混是懼於已正月吉旦識其
 陵谷變遷湮晦是懼於已正月吉旦識其
 乾隆五十年者賞日本天明五年也

それけ瀑布といふより多高く代々の天子もろふ幸ふ
 幸意記小見也通る雲舟の南宮を去る幸二里許めて一那



養老の龍

落りけり後

てきんふふせり

さけきぬとふ

養老乃とれ

江戸浅州府
市人



會の地ありて終を島田といふそわたり山路より登りて養老亭
て所ありて山間小風流の樓を建て其傍に浴室ありて入湯の
人養老水湯ありてこれに浴し老成なりとの偈ありきこれ然
かる時ら奴婦ゆく筆談強き三弦を鳴しき真珠伴にそ終り
養老の祠ありてこれに祖傳といふて溪河を越石を傳ひ後
登る嶺と目し其喜遠道ふあぐれく溪河より山と多き度山
といひ嶺の頂を田孫川といふ又嶺のやうに信来石といふ石
出る石面小坂衣子の様形あり又根芽け木の名を座く地境に勝れ
て香強し真小范希文が嶺の詩小自教洞を下りて飲といひ
もこれ終りや比せん名ありといふ小第一の名といふあるべし

美濃御山 山の上より一ツねあり

新古今

おひやこの山の中へ山にねまじりてさいつもふれど

作勢

新拾遺

つるにみのおや万の山といふふれふとてめり小竜

龜山院

日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て
日蓮上人の著す六老の中日無上人の著すの述令に於て

相川

喪山

神代卷云

藍見川之上 喪山是也 世人惡以生誤

死此其縁也

青野原

青野原

木為二六六

史本

幣懸松

傳云朱崔帝の時東夷平將門退治の時中山金山を神小

後ひきくて幣掛松の名以賞せり後世に人終坂長範と云ふ風

賊はやうふ人んで流雲と集免旅客を就ひは松より遠見せし進

土人終坂相見松と云ふ古代の松と云ふ徳年中大風と倒し今存せり

植松の松るり

わる暑く吹や一本の松をんき

大切の名を盗まふかき乃松

君くばる魯の抱見やねん松

君みくつねと云ふ松の直あるふ

國分寺

清和村の中程にあり入新あり其言古義

吉田 本采

愛知川 芦水

青墓里

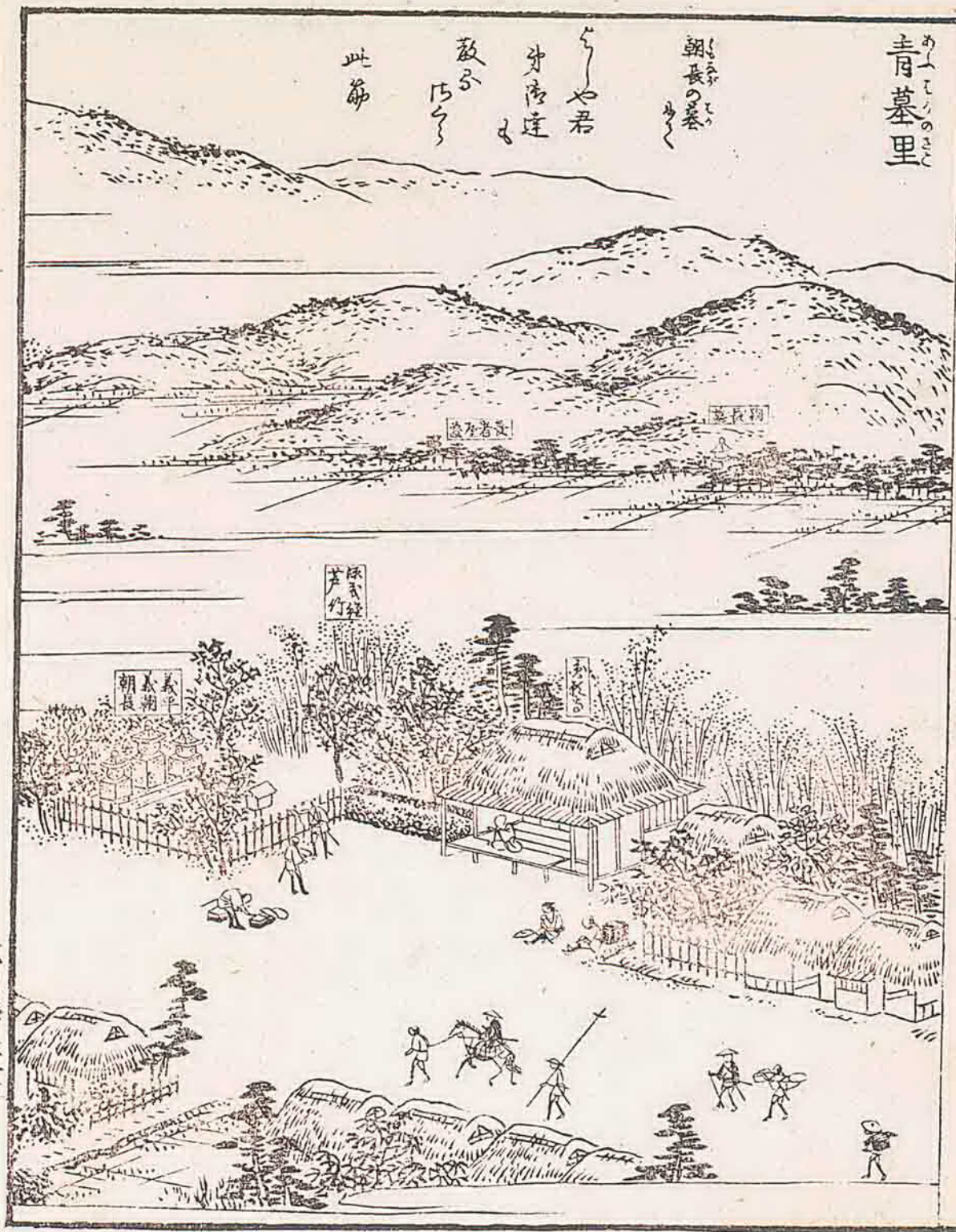
朝長の墓

や君

中流達

教ふ

此節



本巻二九七

長範
物見松

